

廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論（四）

——神道における廣池千九郎の位置——

橋本 富太郎

目次

はじめに

一、神道の範囲

二、神道学における廣池千九郎

三、神道と道徳

おわりに

はじめに

「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論」は、今回の（四）で締めくくりとなる。まずは、これまでの内容をおおまかに振り返っておきたい。

最初の（一）は、副題を「道徳における廣池千九郎の位置」としている（『モラロジー研究』七十三号、平成二十六年九月）。こ

でははじめに、廣池の人物像の全容が理解できるよう、その略歴と、後継者たちによって事業がどのように展開していったのかを紹介し、次に、「道徳」の世界に廣池がいかに位置づけられているかを述べた。

廣池は、現在に至るまで、「道徳」と「教育」の世界では一定の評価を受けており、生前には多彩な活動場において相應の存在感を示していた。しかし、それにしては現在の一般的知名度は高くはなく、断片的な理解が目立ち、研究対象として広い範囲から取り上げられることもなくなっている。

その理由については、第一に、廣池の最終的な活動の場が「道徳」であったこと、第二に、その「道徳」の説く内容に関する問題、第三に、宗教との関係、以上の三点から考察した。

しかし近年の日本社会では、生涯学習への機運の高まりや日

本の歴史・伝統に対する意識の好転、および道德教育の必要性の再認識等が見られることにより、廣池の業績は再評価されつつある。

平塚益徳やJ・A・ラワリーズが普遍的と評した廣池の道德論は、その一方で、神道・皇室をはじめとする日本の伝統が色濃く反映されている。これからの日本の道德を再興し、世界に発信していく上で、廣池の人生を俯瞰して神道と道德の関係を考察することの意味は大きい。

このような環境および課題をふまえて、続いて廣池に関する研究史を概観し、課題を抽出することとした。それが、本「緒論」の(二)と(三)である。

(二)は副題を「研究史前篇」とし、廣池に関する論集の刊行および主な研究者の業績を中心に、研究史を時代順に辿り現在の状況を把握した(『モラロジー研究』七十四号、平成二十七年二月)。

研究の初期の段階では、廣池の残した道德論を確認し、実践のモデルとしてその事跡および思想を部分的に取り上げる個別の研究が手がけられていた。やがて道德科学研究所の研究体制も整い、廣池の生誕百年を機に学術的な研究環境を得て、法制史を中心とする諸々の業績が検討されると、廣池の晩年の道德論の学問的基盤が整理され体系が明らかとなった。

その過程で廣池研究の視角と方法が提示され、廣池が様々な

分野に位置づけられるとともに、道德科学(モラロジー)の形成過程が広く深く検討されるに至った。このような研究成果が蓄積されることによって、『伝記廣池千九郎』の刊行が遂げられ、英訳されることにより国際的な議論の場も提供されている。こうして、廣池の道德論が再検討され、現代的に展開する段階に至った。

次に、本「緒論」(三)、副題「研究史後篇」(『モラロジー研究』七十五号、平成二十七年七月)では、「前篇」で取り上げた諸文献に雑誌論文等を加えて研究の分類を試み、「神道」における廣池に関する研究の現況を把握した。

廣池に関する研究は膨大な量に上り、研究領域も多彩で、神道に関連するものも数多く、幅広く検討されてきた。しかし、廣池の果たした大きな役割からすれば、それが十分理解されているとは言い難い。また、他の領域とともに神道の要素が廣池の道德論の中に、色濃く反映されているにもかかわらず、その道德的効用として把握されることがほとんどなかった。こうした状況は、次のような事情が原因と考えられる。

まずこれまで、神道全般と廣池の人生を通史的にとらえた研究が存在せず、『伊勢神宮』などの文献や国学者との交流など、神道の要素が分解されて個別に論じられてきた。また、神道学史に基づいた研究がなされてこなかったために、廣池の業績がその研究史上に位置づけられることがほとんどなかった。

そもそも、廣池千九郎研究は、神道の分野に限らず、全体的に「研究史」が顧みられることが少ない傾向にあり、そのため、それぞれの研究の相互の関係が把握されないことが多々あった。このことが、廣池千九郎研究が断片的となり、理解が不十分となることの大きな要因の一つだったのである。

そこで本研究では、神道の分野に限らず、全体的に研究史を辿り紙面の多くを割いた。その結果、膨大な量に上る廣池研究にもテーマに偏りがあり、検討されていない課題が相当あることも明らかになっている。神道もその一つであり、研究が急がれる状況にある。

もう一つ、廣池における神道の存在が十分認識されなかった原因には、時代区分の問題があった。廣池の人生が、「中津時代」、「京都時代」と、人生の各年代に区切られて考察される傾向があるため、人生を通じて抱き続けた理念などが見えにくくなっている。

こうした状況をふまえ、本研究「廣池千九郎をめぐる神道学的研究」では、神道の全体像と近代神道史の中に廣池の人生を置き、廣池における神道の道徳的意味を検討することとする。本稿においては、その際の課題を明らかにして研究の方法、および視角を提示して「緒論」の結びとしたい。

一、神道の範囲

まず、神道の範囲について簡潔に検討しておこう。神道は、一部の教派を除き、「教典」というものを持たず、日本の歴史とともに漸次展開してきたものであるため、様々な分野に浸透しており、その範囲は掴み難く、論者、時代によってかなり異なっている。

例えば、『国語大辞典』（小学館）を見ると次のようにある。

神代の昔から伝わり、神慮のまま、まったく人慮を加えない道。日本固有の宗教で、「古事記」「日本書紀」などに見える神代の故事に基づいて、神を敬い、祖先を尊び、祭祀を行なうこと。平安時代以降はこれに儒仏二道や陰陽道の影響が加わり両部、卜部（うらべ）吉田）、垂加、吉川、橘家等の諸流派がおこり、近世にはこれらへの批判から復古神道が提唱された。

日本固有の「宗教」という認識の上に立ち、故事、敬神崇祖、祭祀、および思想などが挙げられている。一方、戦前の論者から代表的なものを一つ選んで見てみると、下記のとおりとなる。

神道とは神の道である。神の道とは日本民族祖先以来の生活原理である。日本民族は皇祖天照大御神の御神徳を歎美し体現し発揚し奉る事を以て生活の原則とし、国家の理

想としてきたのである。而して其の生活原理が天御中主神若しくは国常立尊に淵源する天つ神の命（みこと）であること（天皇）に奉仕することによつて実現されるものと信じ、すめらみことも亦その御神徳を継承し恢弘することによつて、天つ神の命が完うされるものと信ぜられておるのである。¹⁾

これは、河野省三の『神道の研究』の一文である。河野は、戦前に國學院大学学長等を歴任し、神道については包括的な研究をおこなっていたが、ここでは一言でいうと、日本人の「生活原理」ということになっており、宗教的側面はその一部ということである。

さらにさかのぼり、歴史的大家に言わせると、

そも此道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、此道はし^{カシコ}も、可畏きや高御産巢日神の御霊によりて、神祖伊弉那岐大神伊弉那美大神の始めたまひて、天照大御神の受たまひ^{イサナミ}たもちたまひ、伝へ賜ふ道なり、故是以神の道とは申すぞかし、（本居宣長『直毘霊』）

天照大御神が受け継いで伝えたという「道」となる。

このように時代や論者によつて、神道の範囲が著しく異なることがよくわかる。また、近年では、環境問題への関心の高ま

りを受け、神道の自然観が注目されるようになり、「霊的生命観」をもつ一つの「文化」とする見方などもある。²⁾

廣池と神道との関連性を考察するにあたり、この点に留意し、あらかじめ神道の範囲に基準を設けておく必要がある。

そこで、いくつか選択肢があるわけだが、ここは、廣池の生きた時代と国家「近代日本」における神道概念に合わせて、加藤玄智編『明治・大正・昭和神道書籍目録』（明治神宮社務所、昭和二十八年）の項目に当てはまる領域を「神道」として取り扱うことにする。

本目録は、明治元年から昭和十五年にかけて刊行された書籍を、次のように部門分けしている。一 総記、二 国体、三 神典・古典、四 神宮、五 神社、六 祭祀、七 神祇制度、八 社対宗教問題、九 大教宣布、十 教派（宗派）神道、以上の十部門である。書籍を基準とする範囲設定と分類だが、近代日本の神道に関する事物を包括しており、廣池の言行も著述との関連性が高いため、これは有為な基準であると思われる。

本目録には、廣池の著作は、全十部門内の六部門に、十七部の書籍が挙げられている（共同編集の『古事類苑』は一部として一括）。下記に記載された内容を引く。

一、総記

・古事類苑 神宮司序編

明治十二年より大正二年迄編修總裁細川潤次郎とし、佐藤誠実・松本愛重・廣池千九郎其他十数氏の編修校合により成る、その経営は文部省・東京学士会院・皇典講究所を経て神宮司庁にて完成せしもの、総巻数一〇〇〇巻、刊本元版（明治二九―大三刊）美濃判和本三五〇冊、四六倍洋本は五一冊、京都・表現社にて昭和二年一月より刊行本も四六倍洋本五一冊、内外書籍会社にて昭和年間刊行本は菊判洋本にて六〇冊※以下略（二頁）

二、国体

・伊勢神宮

廣池千九郎著、明四一刊一、国体の淵源をも説く（四八頁）

・我国体之精華

廣池千九郎著、大元刊一（五〇頁）

・伊勢神宮と我国体

廣池千九郎著、大四・九刊一

著書「伊勢神宮」に「神宮中心国体論」を付加す（五一頁）

・日本憲法淵源論

廣池千九郎著、大五刊一菊判（五一頁）

・孝道の科学的研究

廣池千九郎著、昭四刊一（五七頁）

・皇室野史

廣池千九郎著、明二六刊一（四六判）（八五頁）

四、神宮

・伊勢神宮

廣池千九郎著、明四一刊一、明四二増訂再版四六倍一五二頁（一八五頁）

・伊勢神宮御鎮座沿革地図

廣池千九郎編、明四四刊、一枚（二八五頁）

・伊勢神宮と我国体

廣池千九郎著、大四刊一（二八五頁）

五、神社大分県各別郡

・中津歴史

廣池千九郎著発行、明二四刊一（四六洋四四六頁）明二九年刊もあり（三五五頁）

八、神社対宗教

・神社崇敬と宗教

廣池千九郎著、日月社発行、宗教叢書第六〇至六四編、大

四・八刊一菊判截三〇〇頁 大七刊一（五版）（四三〇頁）

十、教派神道（一三）天理教

・十九世紀に於ける最も偉大なる婦人の事業

廣池千九郎著、大三・一〇刊一（二三六頁）（四七六頁）

・教徒として見たる天理教

廣池千九郎著、現代百科文庫内宗教叢書三六篇、大三・十刊一（二一六頁）（四七六頁）

・ 帰一協会に於ける廣池博士の天理教講演筆記

廣池千九郎著、大九刊一（五八頁）

・ 天理教信仰の本旨

廣池千九郎著、大五刊一（四七八頁）

・ 天理教にほひかけの文

廣池千九郎著、大八刊一（三三三頁）（四七八頁）

・ 助け一条の御話

廣池千九郎著、大十一刊一（二五九頁）（四七九頁）

・ 天理教祖

廣池千九郎著、大正二刊一（二六三頁）

同教公認の教祖伝にて、大四訂正、大六再訂本等あり
（四八七）

以上、法制史研究を挟む廣池の研究遍歴のうち、言語学を除き大半がここに包括されていることが理解されよう。地方史研究であった『中津歴史』も「神社」研究に該当し、法制史研究と道徳科学研究をつないだ『日本憲法淵源論』は「国体」論でもあった。

しかし、これも全貌を表すには不十分といえる。本目録に記載されていないもので、たとえば小学校の教材用に廣池が著わした『小学歴史歌』（明治二十二年）は、歴史書でありつつ「本邦の歴史を講ずるものは特に其王室の尊嚴万国に冠たるの榮と

其国民の勇敢にして忠愛心に富めるの美とを記せざるべからず」（緒言）と、天皇を中心に国体論を歌い上げたものであり、すでに廣池の思想を十分に表している。また、『道徳科学の論文』（昭和三年）も記載されていない。一見「道徳」を主題としているからであろうが、本書の主要テーマの一つの第十三章上は「日本皇室の御祖先天照大神の御聖徳及び日本皇室の万世一系の真原因」などはまさしく神道論であり、神道研究の道徳的展開の書としての存在が見落とされたいというほかない。長男の廣池千英によれば、道徳科学における神道について、さらに次のような構想があった。

先考の燃ゆるが如き愛国心と、国体研究に対する熱烈なる学究的の信念とは、道徳科学研究の一分科として、是非とも日本神道の新研究を創め、道徳科学専攻塾の基礎精神を確立し、全塾生は勿論、全世界の人類に、日本国体の真髓を周知徹底せしめなければならぬと申して居りました^①。愛国心および国体に対する学究心が、「神道」の研究に結び付けられている。これは、廣池千九郎の実弟、一松又治^②の著書への序文の一節だが、さらにこう続けた。

著者は先考の遺志を承けて、神道研究に没頭すること二十余年、曩に皇紀二千六百年奉祝の記念として、『日本社会神道学』三巻の中の第一巻序論を公刊いたしました^③が、神道の新しき研究として、亦神道の本質を闡明したる良書と

して、学界を始め、各方面の注意を惹いて居ります。（同）
一松の神道研究は、廣池の遺志を承けてのことという。

また、廣池の事跡の特色には、国学者たちとの盛んな交流が挙げられる。廣池は幼少のころより皇典講究所大分分所に連なり、早くから渡辺玄包の指導を受けていた。より関係が深まるのは、廣池を『古事類苑』編纂員に抜擢した井上頼圀と同編集長であった佐藤誠実を介してである。両者との信頼関係は深く、往復書簡等の資料も多く残されている。神宮皇學館教授であった時期の人脈はいうまでもなく、法制史研究のころから接点のある寛克彦とも共有された思想がある。

もう一つ特色づけられる点では、教派神道の価値に他の研究者に先んじて注目し、それを古神道の精神を復興するものとして神道史の本流に位置づけ、神道信仰の意義を盛んに説いたことがある。

これら諸点を補いながら、廣池における神道に関する諸問題を検討していきたいと思う。

二、神道学における廣池千九郎

では次に、「神道学」におけるこれまでの廣池の存在を見ていこう。『国史大辞典』における「神道学」の項目には次のようにある。

神道研究の学問。平安時代の朝廷における『日本書紀』研究や、中世以降の同書神代卷などに依拠する神道説の樹立、神事記録・由緒記・参詣記の作成もあったが、江戸時代後期の着実な古典研究を受けた明治時代から、本格的な展開がなされる。方法論的に主体をなしたものは国学に始まる実証主義であり、史料面では『古事類苑』神祇部の公刊（大正三年（一九一四））が大きく裨益した。第二次世界大戦前における神道学は神道史が中心で、中にも宮地直一は厳密な考証を特色とし、河野省三・佐伯有義・山本信哉・平泉澄・津田左右吉・村岡典嗣らも独特の学風で世に知られた。（以下略）

『古事類苑』神祇部の公刊が史料面で大きく裨益したという。ここには、廣池の同門（井上頼圀門下）であり、『古事類苑』編纂の同僚でもあった佐伯有義や山本信哉の名前がある。一方、同書神祇部のもっとも多くの巻数を編纂し、相応の神道学的業績もあつたはずの廣池はここでは神道学者とはみなされず、名前は見られない。

なお、神道学者と国学者の多くは重なっている。廣池は「神道学者」「国学者」とは自称してはいないが、国学者の系譜に掲載されておられ、『古事類苑』の編纂者だったことよって国学者と看做されることがある。廣池の遺稿の中に、「神宮奉職十九年間国体学者となる」という記述もある。

では、神道系の人物事典ではどうかというところ、わりあいに詳しく記されているが、いくつか問題がある。

① 西田重一編『神道人名辞典』（神社新報社、昭和三十年）

ひろいけせんくらう 広池千九郎

史学者、慶応二年大分県鶴居村に生る。明治十五年中津藩主設立の中津市校を卒業後帆足万里の高弟小川弘蔵の和塾に学んだ。後、京都に出て史学を修め、京都市史の資料収集等を委嘱され、二十八年神宮司庁にて古事類苑に従ひ、三十五年早稲田大学の講師になり、ついで法政大学、高等師範学校等にて史学の講義をなす。四十年神宮皇學館教授に任ぜられ、大正元年法学博士号を授かり同年退職。叙従六位。

② 神社新報社編刊『神道人名辞典』（昭和六十一年）

広池千九郎（ひろいけせんくらう）

慶応二年（一八六六）歿年不詳。史学者。大分県鶴居村に生る。明治十五年中津藩主設立の中津市校を卒業後、帆足万里の高弟小川弘蔵の私塾に学んだ。のち、京都に出て史学を修め、京都市の資料蒐集等を委嘱され、二十八年神宮司庁にて『古事類苑』編纂に従ひ、三十五年早稲田大学の講師になり、ついで法政大学、高等師範学校で史学を講義。四十年神宮皇學館教授に任ぜられ、大正元年法学博士号を得、同年退官。叙従六位。

まず名前からして両者とも間違えている（正しくは「ちくろ

う）。さらに誤りを指摘すると、廣池が学んだのは「和塾」ではなく、「漢学塾」であり、法政大学、高等師範学校では教鞭をとっていない。そして神宮皇學館の退官は大正二年である。没年も不詳ではなく一九三八年とはつきりしている。

また、記載されている事跡が神宮皇學館退官で終わっているのは、神道における業績の上でもはなはだ不十分である。廣池は、上記『明治・大正・昭和神道書籍目録』における「国体」に関する研究を進展させていて、やがて『道徳科学の論文』において、「国家伝統」および「道徳系統」として皇室を世界に普遍化するという地平に到達している。

この点は、昭和初期の時点で神道に深く関わる優れた業績であると同時に、現在においても示唆に富む見解である。それにもかかわらず、学界における評価が不十分であることの原因を明らかにしなければならない。

次に、國學院大学日本文化研究所編『神道人物研究文献目録』（弘文堂、平成十二年）を見てみよう。

廣池千九郎（ひろいけちくろう）

慶応二年（一八六六）三月二十九日～昭和十三年（一九三

八）六月四日

（財）モロロジー研究所の創始者。中津市出身。『古事類苑』編纂に携わり、神宮皇學館教授に就任。大正元年（一九一）に『支那古代親族法の研究』で東京帝国大学より

学位授与。その後、病いをきつかけに天理教に入信し、教育顧問兼天理中学校長をつとめる。やがて天理教から離れ、古今東西の道德の研究に入り、大正十五年（一九二六）『道德科学の論文』を完成させる。これをもって道德科学研究所（現、モラロジー研究所）の創立としている。（弓山達也）

少なくとも略歴に誤りはないが、「神道人物」として挙げるべき『伊勢神宮』や『日本憲法淵源論』等の主要な業績が漏れており、これもまた断片的な理解だといわざるをえない。本書は「研究文献目録」なので、その人物に関する「研究書」と「研究論文」がリストアップされているが、そちらはどうだろうか。

【研究書】には、『モラロジー研究』二五〔広池千九郎博士没後五十年記念号広池博士の事蹟と思想〕一九八八、『モラロジー研究』二六、二七〔広池千九郎博士没後五十年記念号モラロジーの現代的展開〕一〇二、一九八八、の三点をあげ、【研究論文】には、『モラロジー研究』から丹念に、二十七本の論文を拾っている。しかし、廣池研究のもっとも基本的文献たる内田智雄編『生誕百年 広池博士記念論集』（広池学園事業部、昭和四十二年）にも、また廣池千九郎著・内田智雄校訂『東洋法制史研究』（創文社、昭和五十八年）にも大部な解説があるがこれにも触れていない。廣池の代表的な神道研究書『伊勢神宮』

（明治四十一年）等が記載されていないのは、研究書が十分に拾われていないことも一因であろう。

その一方で、『新宗教事典』（弘文堂、平成二年）では廣池の略歴は正確でバランスも取れており、しかも詳細で、『皇學館百二十周年記念誌』（学校法人皇學館、平成十四年）における廣池の紹介にはこれが丸ごと転載されているくらいである。廣池に関心を持つ研究者の間に偏りがあり、宗教学者の論が強くなっていることの一つの表れといえる。

三、神道と道德

廣池が様々な研究および職業の遍歴を経て、最終的に道德の研究と教育に一身を捧げたことは周知のとおりである。神道についても、その道德論の中に取り入れられていることは、本「緒論」の中でも何度か触れてきた。

それがどのような内容で、いかなる体系を持つかについては、本研究の主要テーマであり、今後時間をかけて検討すべき課題である。ここではその前段階として、「神道と道德」がこれまで一般的にどのようなように説かれてきたかを歴史的にふりかえておきたい。

神道の徳目として、最初に挙げるべきものを「清浄」とするのは、多くの論者の認めるところである。神道を専門とすると

ころ以外からもその点は共有されており、例えば教育人間学の
下程勇吉は、『日本の精神的伝統』（広池学園出版部）に仏教、儒
教、近代思想等々、日本の精神文化を通覧しているが、その最
初に「神道の系譜」を掲げ、「農耕人として水浴に親しんだ日
本人が、それに清潔・純粹・透明・潔白等の道徳的宗教的意味
をも与えたことは、理解しがたいことではない」（六頁）、「日
本人にとっては、膚に垢をとどめることと心に汚れを宿すこと
とは、一味である」（同）、「身の濁穢を「ミソギハラウ」とこ
ろに、太陽神の誕生が語られる」（七頁）と、日本の豊富な水資
源と関連づけて「清浄」を論じている。

歴史的な言説から、よく言及されるものを一つあげると『伊
勢太神宮参詣記』に次のような一文がある。

当宮参詣のふかき習は、念珠をもとらず、幣帛をもさ、け
ずして、心にいのる所なきを内清浄といふ、潮をかき水を
あびて、身にけがれたる所なきを、外清浄といへり。内外
清浄になりぬれば、神の心と我心と隔なし。すでに神明に
同じなば、何を望てか祈請のこゝろ有べきや、是真実の参
宮也と承し程に、渴仰の涙とゞめがたし。（増補大神宮叢書

『神宮参詣記大成』八八頁）

欲心を去り、心を清浄とすることと、禊によって体を清める
ことの両面から説き、心身が清浄であればすでに神意と合一し
ており、祈願などは必要ないという。

次に、広く流通したものとして、三社託宣を挙げておきたい。
・天照皇大神宮・謀計雖為眼前利潤、必当神明之罰、正直雖
非一旦依怙、終蒙日月憐。

・八幡大菩薩・雖為食鉄丸、不受心汚人之物、雖為座銅焰、
不到心穢人之处。

・春日大明神・雖曳千日注連、不到邪見之家、雖為重服深
厚、可趣慈悲之家。

（『神道事典』弘文堂、等）

これは、天照皇大神宮・八幡大菩薩・春日大明神の三神の託
宣として、「正直」「清浄」「慈悲」の三つの徳目を掲げ、内容
を説いている。大菩薩とあることからわかるとおり、神仏習合
の要素があり、純粹な神道とはいえないが、このように仏教・
儒教を取り入れながら、道徳的内容を展開させてきたことに神
道の特色があるともいえる。

儒教を取り入れた代表的神道論には、山崎闇斎（一六一八—
一六八二）の「垂加神道」がある。闇斎は朱子学を修めた後、
神宮大宮司、河辺精長から伊勢神道を、吉川惟足から吉田神道
を伝授された。「垂加」とは「神の垂は祈禱を以て先となし、
冥の加すは正直を以て本となす」から採られた闇斎の号で、出
典は伊勢神道の経典、神道五部書の一つ『倭姫命世記』である。
神の恩恵は敬虔な祈りによって下され、神の加護は正直に生
きることによって受けることができるという。闇斎は終生この

「神垂祈祷、冥加正直」の語を指針とした。

關齋は同様に『倭姫命世記』の一節「日月四洲を廻り、六合を照らすといへども、すべからく正直の頂を照らすべし」⁽¹⁾を引用している。

もう一つ、關齋の神道論の中で有名な文句として「道は則ち日神の道にして、教は則ち猿田彦神の教なり」がある。それによると、神道とは天照大神の神勅を受けた皇孫である天皇が統治する道であり、「つつしみの徳目」をもって人格を涵養することである。

これに対して、儒教等の影響を排し、純粹な大和心を志向した本居宣長は、神道の道徳面については次のようにいう。

いにしへの大御代には、しもがしもまで、たゞ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみるやびまつるひて、おほみうつくしみの御蔭にかくるひて、おのおのも祖神を齋祭つ、^{オヤガミ、イツキマツリ}ほどほどにあるべきかぎりのわざをして、^{オホミ、オホミコト}穩しく^{オホシ}榮く世をわたらふほかなかりしかば、今はた其道といひて、別に教を受て、^{コト}おこなふべきわざはありなむや、⁽¹²⁾

天皇の心に帰一し、神の恩恵に感謝してこれを祭り、本性に従って明るく生きるという、教条的な教えではない、神道の心を唱えている。

宣長のこのような見方があるものの、神道の徳目には概して

儒教の貢献が顕著であり、また、仏教の中にも「清浄」は説かれることがある。

では、神道の独自性は、いかなるものであるかというと、それは、日本の風土・神々・皇室との関わりのある場において説かれた際に現れるものとみられる。村岡典嗣は、こう記している。神また神孫としての天皇に対しまつる、清き明き心の道といふところに、凡ての神道道徳思想は出発し、また帰結するのであり、そこに神道道徳の、その他の道徳に対する一もとより幾多の共通性あるにも拘らず、特殊性は存する⁽¹³⁾。

神道は「清き明き心の道」は、天皇と関係することによって、その他の道徳とは異なる特殊性をもつという。そして、この文は次のように続けるのだが、ここは注目を要する。

而してかくの如き神道道徳思想の学的体系に至つては、今日に至るまで未だ、少なくとも十分な意味で成形されたとはい言ひ得ない。

村岡は、神道の道徳的側面を子細に検討し、その果たしてきた役割を十分に認めている。また、神道の独自性についても上記のように、指摘していた。しかし、神道における道徳思想は、学的体系を得るまでには至っていないという。

神道の道徳面については以上のような様相であるが、では、宗教的な面ではどうか。

西村茂樹は、「神道と云ふ者は一時（神祇官を置いて之を太政

官の上に班せし比) 政府にて大に之に助力し、頗る隆盛に向はんとするの勢いありしかども、到底其説く所は当時人智開達の度に伴ふこと能はず」と、神道の宗教性を文明開化の日本においては無用のものとし、「本邦には固有の教法なし」といい、日本在来の宗教には道德教育における役割をまったく期待していなかった¹⁴⁾。また、井上哲次郎は「神道は宗教としては仏教や基督教に較べると遙かに幼稚なもの云ふことになりまされども、併し何分神道は道德の側では却つて近世的傾向があり、且つ国家的、民族的である¹⁵⁾」と、国民道德としての役割は認めつつも、やはり宗教としての神道は低く位置づけていた。

ここで、廣池における神道を改めて考えてみたい。廣池は、モラロジーの学問体系の中に、神道を有力な徳目の一つとして構造化している。また、皇室の伝統に息づく神道は、四大聖人に由来する系統とともに、五大道德系統の一つとして相対化され、世界の中に普遍化されるといふ展開を遂げている。このことは、先人たちが残してきた神道における道德の「学的体系」への課題に応えたものといえるだろう。

また、廣池は、神道の宗教と道德の両面にすぐれた価値を置き、「道德系統」および「国家伝統」の概念によってその理論化を成している。加えて、宗教的救済と道德実践の間を、最高道德の解明と道德実行の効果の科学的証明によって、橋渡しをしたのだった。

こうした廣池の神道と道德に関する事跡および思想の研究は、近代神道史解明の一助となるばかりでなく、これからの日本文化の再確認、そして道德教育の再構築にも示唆を与えていくものであろう。

おわりに

本研究の概略を述べると次のようになる。

近代日本における神道の把握と新たな道德への展開を、廣池という一人物の事跡・思想形成史を通して捉える。当時、「神道」概念の枠内にあった神祇、国体、神道思想、祖先崇拜、尊王、教派神道、国民道德といったものが一人の人物の中で統合され、「最高道德」という道德の一角を成して再生産され、普遍化される過程を跡付けるといふものである。そして「伝統の原理」などに展開された神道的なものが改めて世に問われることになる。神道の信仰、儀礼、習俗にどのような道德的意味があるのか、また、祖先崇拜、子孫繁栄などの神道的理念が日本の道德の再生に如何様な意味を持つのかを検討される。

『廣池千九郎日記』の解説には次のように記されている。

(廣池は) 皇室の祖先の「慈悲寛大自己反省」という偉大な道德的行為が皇室永続の理由であることを明らかにしている。そして廣池は、日本皇室の道德を日本古来の神道の

精神と一体のものとし、この固有の神道の精神、道徳を普及することが、日本社会の道徳的更生の要になるものと考えた。⁽¹⁶⁾

こうした研究の成果は、現代日本においても「道徳的更生の要」となると思われる。

また、廣池の『古事類苑』における功績、神宮皇學館における事跡や神道論、伊勢神宮観や教派神道観における独自性などが検討される。神道史の中に廣池千九郎の業績を位置づけることにもなるだろう。

今後の研究では、神道と道徳との関連が集中的に検討された神宮皇學館時代の研究と教育とを基盤として、「神宮中心国体論」の形成を経て、『道徳科学の論文』における「伝統の原理」と「道徳系統論」に展開する過程を考察する。

註

- (1) 河野省三『神道の研究』森江書店、昭和七年、一頁
- (2) 『本居宣長全集』⑨、筑摩書房、昭和四十三年、五七頁
- (3) 神社新報創刊六十周年記念出版委員会『戦後の神社・神道―歴史と課題―』神社新報社、平成二十二年、四一―八頁
- (4) 廣池千英「序」一松又治『大政翼賛の指導原理』社会神道政策会、昭和十六年、二頁
- (5) 國學院撰科を卒業し、中学校教師を歴任後、『伊勢神宮と日本精神』、『伊勢神宮と大和民族』、『日本社会神道学序論』等を著わ

す。一時、東亜外事専門学校の教師を務めた。モラロジ研究所編『廣池千九郎日記用語解説』廣池学園出版部、平成六年、参照。

- (6) 大日本人名辞書刊行会編刊『大日本人名辞書』増訂十一版、昭和十二年

(7) 「幕末から明治期にかけての様々な経歴を持つ多様な分野の国学者が、この編纂に関与した」(熊田淳美『三大編纂物群書類従古事類苑国書総目録の出版文化史』勉誠出版、一二八頁)

(8) 遺稿「予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟」。昭和十六年に刊行された同名書籍の元になった原稿と思われる。両者の間には内容に若干の相違がある。

(9) 拙稿「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論(一)―道徳における廣池千九郎の位置―」『モラロジ研究』七十三号、平成二十六年、参照。本稿の「はじめに」にその要旨は述べた。

(10) 「垂加社語」『日本思想体系』三九、岩波書店、昭和四十七年、一二〇頁

(11) 同

(12) 前掲『本居宣長全集』⑨、六一頁

(13) 村岡典嗣「神道における倫理想」『日本思想史研究』③、昭和二十三年、七三頁

(14) 西村茂樹『日本道徳論』(『西村茂樹全集』) 思文閣、昭和四十二年・五十一年復刻、七・一八頁。

(15) 井上哲次郎『国民道徳概論』三省堂、明治四十五年、一四一頁

(16) モラロジ研究所編『廣池千九郎日記』①廣池学園出版部、昭和六十年、解説一―三頁

(キーワード) 神道、廣池千九郎、道徳、研究史